ピアス・バトラー『図書館学序説』を読み直す

折田 洋晴（立教大学兼任講師）

昨年度（2011 年度）から情報資源組織演習・目録を担当している。私は，この年（2011）の３月に国立国会図書館を定年退職し，縁あって立教大学で教えることになったが，教えるという立場上，図書館学とは何であるかを確認しておこうと，きちんとは読まないまま埃に塗れていたピアス・バトラー著『図書館学序説』（藤野幸雄訳，日本図書館協会，1978）を再読し始めた。ところが，冒頭の一文で躓いてしまったのである。まず，「図書館は近代文明のなかで，実際上の必要から創りだされたものである」（邦訳 p. 23）とある。古代・中世に図書館は無かったと言うのであろうか。原文に当たると“The library has been created by actual necessities in modern civilization.”[1] となっている。とすると，これは「図書館は近代文明の時代に入ると，実際上の必要によって創られるようになり，それが今日まで続いている」といった意味なのであろうか。これ以外の箇所でも，例えば「挿絵の歴史のみが近代的学問による技術の全史を要約している。」（邦訳 p. 99-100），「この［書誌の歴史の］研究から得るところがあるかどうかは，形式的な書誌の図式というものを歴史の簡略な記述として読みとる技術を身につけているか否かに大きく依存している。」（邦訳 p. 123）などなどの箇所で，はたしてどういう意味なのかと考え込んでしまう。原文をじっくり読むと，これらは「挿絵の歴史をたどるだけで，近代の学術技法の全体史をつかむことができる。」，「図書館員が書誌の歴史の研究から益を得られるかどうかは，形式の整った書誌に記された表のように短く並んだ記述から歴史の概略を読み取る能力があるかどうかに懸かっている。」といった意味であろうか。この本は全般に抽象的な言葉が多く使われ，真意の読み取れない箇所が多いのである。

しかし，『図書館学序説』は非常に高名な本だそうで，訳者の序文によれば，戦後の日本でも図書館学教育によく利用されてきたという[2]。しかし，今では初版刊行（1933）以来 80 年も経っているので，その内容も古びているだろう。そこで，この本の歴史的評価をしながら，今後の展望を語ってみるというつもりで読み始めたのだが，上記のように至るところで躓き，とても評価など出来そうもない。以下は，本書を少しでも理解しようと色々調べたことを大雑把に述べたものなので，ご寛恕のほどをお願いしたい。

図書館の定義をめぐって

まずは，冒頭で躓いた図書館と近代という話から始めよう。ピアス・バトラー（1884-1953）はペンシルベニアのカレッジ卒業後，中世史研究を志してニューヨークの Union Theological Seminary に入学し直しており，中世の文献に詳しい。1916 年にはシカゴのニューベリー図書館に入り，ウイング・コレクションというインキュナブラ資料の責任者を務めたので，ルネサンス時代にも詳しい。その彼が本書で，図書館は近代に創られたと言うのは，この本のテーマがある時代以降の図書館に絞られるということである。本書では，近代の始まりが何時からかを明らかにしてはいないが，バトラーが 1951 年に書いた Librarianship as a profession という論文[3] では，古代・中世・ルネサンス・啓蒙時代の図書館は近代図書館の先駆にあたるものであり，近代図書館は出来てからまだ 200 年も経たないほど新しいものであるとしている。アメリカ図書館史での Library Company of Philadelphia あたりが彼の言

う図書館の嚆矢ということで，我が国で言えば，フィラデルフィア図書館会社から 100 年以上遅れの，明治の西洋式図書館が図書館であるということになる。バトラーはニューベリー図書館時代にインキュナブラを広く収集するためヨーロッパに出かけて，多くの古書店を廻っているが，インキュナブラを多く所蔵するヨーロッパの古くからの大きな図書館を訪れた形跡はなく，これらの図書館は彼の図書館論の手本にはならなかった。むしろ反面教師と見られていたのかもしれない。

それでは，「実際上の必要から創られるようになった」という図書館は以前の図書館とはどう違うのであろうか。これについて『図書館学序説』では明確に述べられているわけではないが，第１章：科学の性質で，近代の産物としての科学が長々と述べられており，科学が社会の構造，人々の精神性を変えてしまい，この精神に合致するものとして「実際上の必要から」図書館が創られるようになったという見解が述べられているように思われる。そして，「実際上の必要から」創られた図書館の仕事もまた「実際上の必要」に基づいて行なわれるべきだということになるが，それと科学との関係が問題となってくる。

科学技術をめぐって

『図書館学序説』が執筆されるきっかけになったのは 1931 年に起こったアメリカ図書館界での図書館学のあり方をめぐる論争であった。バトラーはちょうどこの年にシカゴ大学の大学院 Graduate Library School（GLS）の教授となったが，この年は GLS の雑誌 *Library quarterly* が創刊された年でもあり，創刊号に GLS 教授 Douglas Waples（1893−1978）は GLS の方針などを述べた論文[4] を寄せた。同年６月のアメリカ図書館学会（American Library Institute）[5] で C. Seymour Thompson は，ウェイプルズの論文に書かれた図書館学を科学にするという考えに対し，図書館学は科学ではないという論陣を張り，「図書館学をアートにしよう，科学に触られることのない芸術に」という言葉で締めくくると，満場の拍手が起きたという[6]。同僚のウェイプルズの主張を支持しながら，自身の歴史知識をもとに人文学的要素を取り入れて執筆されたのが『図書館学序説』であった[7]。そして，図書館員は科学的であるべきか，人文学的であるべきかというテーマをバトラーは以後，何度も考え直している。

ところで，『図書館学序説』は 1933 年の刊行なので，ここでの科学を現在のものと同じと考えると誤ってしまうかもしれない。バトラーと同じ年に生まれたフランスの科学史家ガストン・バシュラール（1884−1962）が 1938 年に『科学的精神の形成』[8] で示した科学的精神の３区分を流用すると，第１期は古代から 18 世紀末までの自然科学以前の段階，第２期は 18 世紀末から 20 世紀初頭までの自然科学の段階，第３期はアインシュタイン以降の新科学精神の段階であり，バトラーが科学と呼んでいるのは第２期のことである。この時期は自然科学というジャンルが成立しただけでなく，それと密着したテクノロジーが現れ，産業革命が起こった。その中で出版業も大きな変貌を遂げ，書籍の低価格化と大量部数の発行が進む。その背景には識字率の大幅な伸びがあり，これらがバトラーのいう図書館の成立をもたらしたのである。

『図書館学序説』は図書館学研究の科学化（自然科学化ではなく社会科学化）を大きな主張としているが，実はこれまで，こうした出版業の大きな変貌を実証的に示すデータがなかった。近年になって，書誌データベースが過去の書籍についても遡及入力され，欧米での長期にわたる期間の新刊タイトル数の統計が得られるようになったが，発行部数や実際の生産量示す文字数の単位での統計は未だなく，タイトル数の統計にしても，版と刷の同定がきちんとされていないので，ラフな数値の状態である。それでも，こうしたデータ

ベースを使った経済史や産業革命の研究が行なわれるようになった。最近のグローバル経済史の研究では，西洋の経済的優位はやっと 1800 年代になってからで，ここで「大いなる分岐（great divergence）」が起き，今日のような地域による大きな貧富の差が生じたという[9]。その理由に挙げられるのが産業革命であり，その背後には knowledge economy と呼ばれる，有益な知識（useful knowledge）を牽引役とした経済の勃興がある。この説を主張する J. Mokyr は Eighteenth Century Collections Onlin（ECCO）というデータベースを使ってデータを集めているし[10], J. L. van Zanden は Heritage of Printed Books Database（HPB）などのデータを使って，ヨーロッパでの長期的な出版統計を作成している[11]。ファン・ザンデンによれば，書物の値段は 15 世紀半ばから 19 世紀初頭の間に 1/10 まで下がったという。この間にヨーロッパの人口は約 2.5 倍になったのに対し，出版部数は 40 倍にもなっており，人口１人当りの本の消費が 16 倍になったことになる。読者層が一部の限られた人々から，知識を求める有為の人々へと広がり，本の主題も哲学・宗教から科学や文学へと移って行った。そして，有益な知識の中身に科学が多く含まれていたことは言うまでもない。

情報の過剰をめぐって

バシュラールのいう第３期の新科学の中心となる相対論や量子論は日常では経験できないことがらを扱う。この人類未知のフロンティアは 16 世紀の地理上の発見のように知のグローバル化をもたらし，豊かな国での出版増，いわゆる情報爆発が顕著となった。戦後の学術図書館はほとんど，この情報爆発への対応に追われたと言っても良いほどだが，実は，グーテンベルクによる印刷術の発明から百年後には，この情報の増大を問題視する人たちがいたのである[12]。書誌学の父 Conrad Gesner（1516-1565）による最初の書誌として有名な *Bibliotheca universalis*（1545）の序文（Epistola nuncupatoria）には，多数の書籍の流通による混乱と害毒（confuse & noxia illa librorum multitudo）への嘆きが述べられている[13]。17 世紀に入ると F. Sacchini：*De ratione libros cum profectu legend libellus*（1614）や F. Araoz：*De bene disponenda bibliotheca*（1631）のような良書の読書法に関する著作が登場している。書籍や読書の質が問われるようになったのである。この問いが人文学的なものか科学的なものかということが，前の述べたトンプソンとウェイプルズの論争の争点でもあった。トンプソンは 1853 年に C. Jewett（1816-1868）が述べた‘the diffusion of a knowledge of good books, and enlarging the means of public access to them’こそが図書館学の重要課題であると主張し，これに対しウェイプルズは，good books と言うが good for whom? と good for what? を明らかにしなければならない。それには読者に関する研究が必要だとした。こうした論点について，バトラーは『図書館学序説』の中で「図書館においては，学校の教科に劣らず，対象となる人たちの種類を考慮とした選択が，社会的に有効といった意味で唯一の基準となろう。」（邦訳 p. 73）と書いているが，さらに「科学は善とか悪とかを汎人間的な価値として区別することはできない…」（邦訳 p. 73）が締めくくりの言葉であり，good, bad の判定は科学の範囲ではないとしている。トンプソンがすべての人間に共通する倫理のような人文学的命題を要求しているのに対し，ウェイプルズは人間は社会の中では差が大きいという社会科学的命題を要求しており，中に入ったバトラーが苦労しているという構図が見られる。

1935 年，スペインの哲学者オルテガ・イ・ガゼット（1883-1955）はバルセロナで開かれた IFLA の Second World Congress of Libraries and Bibliography で「司書の使命」と題する講

演を行なった[14]。1930 年に『大衆の反逆』を発表して，ヨーロッパは大衆が支配する時代となっており，凡庸が蔓延する社会となったと書いていた彼は，講演では，既にあまりにもたくさんの書物があり，西洋社会は書物を反逆的なやっかいものと感じ始めている，図書館の使命は不要な書物を整調する濾過器となることだとした。果たして，これは無茶な言い分なのであろうか。

こうして，情報が過剰なものになっている（information overload）かどうかということが議論の対象になってくる。メディアが多様化し，情報がかくも溢れるようになった背景には，先に述べた情報の低価格化と共に，情報消費の極端なほどの増大ということがある。この過剰を積極的に受け止め，進歩であるとする見方が一方であるとすると，他方では，過剰は実際上の格差を生んでおり，世界全体からみれば損失であるという見方もある。情報は大半が短命で消え去り，地球資源の無駄使いという印象も与えるが，一方で巨大データが処理できるようになったことで，ロングテール部分の寿命が延びたという見方もある。一体どちらが正しいのであろうか。

情報生産の背後には経済活動があり，その経済が世界的に危機を迎えているというのが昨今の状況であるが，水野和夫[15] によれば，限られた国・資本にマネーが過剰に収集され，もはやその有効な投資先がなくなってきた結果，彼らは金融でマネーを増やすゲームの世界に入り，いつ起きるとも知れぬ危機にさらされている。科学も技術も過剰をもたらし，この危機を回避するには，21 世紀は全く新しい考え方が必要であるという。紙の本から電子本へのシフト，図書館の電子図書館化なども過剰さを引きずっており，新しい考え方が必要なのではなかろうか。水野によれば近代は終わっており，バトラー風に言えば，今の図書館は来たるべき図書館の先駆に過ぎないということになる。今後にそんな大きな変化が待っているのであろうか。

おわりに

経済恐慌が来るかどうかは神のみぞ知るであるが，電子テクノロジーの発達は一方では電子図書館をもたらし，他方ではリーマンショックから始まる経済危機をもたらした。フランスの Que sais-je? という，日本では新書にあたる双書では，A. マソン・P. サルヴァン共著の『図書館』が 1961 年以来，版を重ねてきたが，さすがに内容が古くなったと判断されたか，昨年（2012），著者 Pierre Carbone による新しい『図書館』が刊行された[16]。この本には，経済危機のあおりで図書館の開館時間が短くなったり，閉館となるものも出てきていることが記されている。電子化が図書館から建物や職員の削減をもたらし始めているという。最後に，図書館と経済危機の関係を見ておこう。

『図書館学序説』が書かれたのは世界恐慌の時代であった。この本には不況や失業などの話は出てこないが，図書館も恐慌の大きな影響を受けている。実際の影響は 1931 年頃から出始め，予算削減にどう対応すべきか，押し寄せる利用者をどうさばくかなどが問題となった。GLS は 1932 年より全米の図書館の影響に関するデータを集め始め，第１報を *Library quarterly,* v. 2（1932）に掲載した[17]。恐慌から回復した 1941 年には M. M. Herdman が GLS に *Public library in depression* という学位論文を提出している。その要約が *Library quarterly,* v. 13（1943）に掲載されている[18] ので，簡単に紹介してみよう。全米の公共図書館の 1930 年から 1935 年までの貸出と予算の変化を調べると，以下のことが分かった。①貸出数は 1932 年と 1933 年にピークがあった。数の多かった上位２地域は南部，ニューイングランドである。②成人への貸出が増加した一方，児童への貸出は減少した。③成人

への貸出はフィクションよりノンフィクションの方が多い。④貸出冊数だけでなく貸出人数も増加した。⑤予算は 1932 年と 1933 年が底であった。1935 年は 1930 年まで回復していない。⑥職員給与も減少したが，減少率は予算全体より低い。⑦図書費の減少率は予算全体より高い。⑧貸出の多かった年は失業者の多かった年である。⑨この期間に出版数・映画上映数は減少し，貸本数・ラジオ受信機台数は増加した。等々。また，この期間に図書館の相互協力が推進されたという。当時，その他にも様々な調査が行なわれたが，その全貌は R. S. Kramp の学位論文[19] でレヴュ―されているので，そちらに譲る。

以上，『図書館学序説』を読み直すというタイトルを掲げながら，それほど読み直してはいない文章となってしまった。バトラーの『図書館学序説』には，現在でも乗り越えられていない課題が多く書かれていると思うが，その問題の根源を把握しきれないのは，私の非力故である。私と同様に『図書館学序説』を読むのに苦労されている方もあるかと思い，あえて寄稿させてもらった。

---

1) 原文は HathiTrust Digital Library（http://www.hathitrust.org/）で閲覧できる。

2) アメリカで本書のペーパーバック版が出版されたのは 1961 年のことで，入手が容易になったのはこの年以降のことである。

3) *Library quarterly*，Vol. 21，No. 4．1951．10，p. 235-247．
この論文は当時バトラーが用意していた *Introduction to librarianship* という著作の中間報告として書かれたというが，バトラーは 1953 年に交通事故で亡くなり，もうひとつの『序説』は完成しなかった。その構想は librarianship as a technology，librarianship as a science，librarianship as a humanistic discipline，education for librarianship の 4 章からなるはずであったという。

4) D. Waples. The Graduate Library School at Chicago，*Library quarterly*，vol. 1，no. 1，1931．1，p. 26-36．

5) アメリカ図書館学会は Melvil Dewey（1851-1931）の提唱で 1905 年に設立された，メンバー100 名に限られた図書館学会。

6) J. Richardson，Jr. *The spirit of inquiry；the Graduate Library School at Chicago，1921-51*，American Library Association，1982，p. 92。この論争については吉田右子『メディアとしての図書館』日本図書館協会，2004，p. 86-89 も参照のこと。また *Library journal* 誌上で展開されたトンプソンとウェイプルズの論争の論文は D. J. Ellsworth ＆ N. D. Stevens ed. *Landmarks of library literature，1876-1976*，Scarecrow Press，1976，p. 110-131 に再録されている。

7) バトラーは letter の形での C. S. トンプソンへの反論を雑誌 *Libraries* の編集者 Mary Ahern に送ったが，長すぎるという理由で掲載されなかった。そこから，きちんとした 1 冊の本としての『図書館学序説』が生まれたという。これについては J. Richardson，Jr. *The gospel of scholarship；Pierce Butler and a critique of American librarianship*，Scarecrow Press，1992，p. 85-86 を参照のこと。

8) 原書は *La formation de l’esprit scientifique*，Paris：J. Vrin，1938。

9) R. C. Allen. *Global economic history；a very short introduction*，Oxford University Press，2011 を参照。本書は『なぜ豊かな国と貧しい国が生まれたのか』という題で邦訳が刊行されている。

10) ジョエル・モキアには *The enlightened economy；Britain and the industrial revolution，1700-1850*，Yale University Press，2009 や *The gifts of Athena; historical origins of the knowledge economy*，Princeton University press，2002 といった著作がある。

11) Ｊ．Ｌ．ファン・ザンデンには *The long road to the industrial revolution；the European economy in a global perspective，1000-1800*，Leiden：Brill，2009 という著作があり，Pt. 3：Common workmen，philosophers and the birth of a European knowledge economy（p. 143-201）では，出版業と経済成長の関係が広範囲な観点から扱われている。

12) D. Rosenberg. Early modern information overload，*Journal of the history of ideas*，Vol. 64，No. 1，2003. 1，p. 1-9.

13) A. M. Blair. *Too much to know*，Yale University Press，2010 を参照のこと。この本は情報過剰への対策としてのレファレンスブック出版の歴史が扱われている。

14) この時，オルテガは眼鏡を忘れてきたり，書見台を倒したりと大変であったという。C.G. Sparks. *Doyen of librarians；a biography of William Warner Bishop*，Scarecrow Press，1993，p. 292 を参照のこと。

15) 水野和夫『終わりなき危機：君はグローバリゼーションの真実を見たか』（日本経済新聞出版社，2011），同『世界経済の大潮流』（太田出版，2012）などを参照。

[16] P. Carbone. *Les bibliothèques,* Paris: Presses Universitaires de France, 2012。図書館の閉館の話は p. 16 にある。

[17] The public library in the depression, *Library quarterly,* Vol. 2, No. 4, 1932. 10, p. 321-343.

[18] M. M. Herdman. The public library in depression, *Library quarterly*, Vol. 13, No. 4, 1943. 10, p. 310-334.

[19] R. S. Kramp. *The Great Depression; its impact on forty-six large American libraries: an inquiry based on a content analysis of published writings of their directors*. Thesis-University of Michigan, 1975. この論文は 2010 年に Library Juice Press から刊行されている。